慶長十五年版倭玉篇の版種

岡田希雄

一

慶長十五年版倭玉篇と云ふのは、自分の所謂「慶長版倭玉篇」の中で、「慶長庚戌仲春日」と云ふ、刊記と認め得べき日附の存するものゝ事であつて、是れには、下卷最終の頁の第六行に楷體で右の刊記七字のみが刻してあるものと、右の七字の存する上に更らに其の次行に埋木を施して其れに「於洛陽二條通二王門町開板」と云ふ十二字及び判讀し難き二字か一字を、黑地に行草體の白字として陰刻してあるものとが存し、是れらは、日附が全く同じであると云ふ事、及び、其れらの木は、本文の體裁が全く辨別しかねるくらゐに、又文字の一點一畫の形に於いて相異が殆んど識別しかねるくらゐに酷似して居る事（この事は、十八年の單刊記木も亦、其の通りである）の爲めに、是れらは「慶長庚仲戌春日」とあるのみのものに就いて云へば、其れらは、どれもこれも全部同じ版木で摺刷せられたものだらうと云ふ粗漏な解釋が下され勝ちであり、埋木陰刻のあるものと、然らざるものとに就いて云つても亦、やはり同一の版木で摺刷せられたものである、と云ふ解釋の不注意に下される事もあるのであるが、注意して觀察する時は、是れらのものは、版木の種類から云へば明らかに二種が存し、摺刷せられた時期から云へば、明らかに三種、卽ち

ロ　初刊本（「慶長庚戌仲春日」とあるのみのもの、次ぎのハ本の同版前摺である）
ハ　有刊所本（慶長庚戌云々の刊記の次ぎに於洛陽云々の埋木除刻のあるもの、前のロ本の同版後摺本）
ニ　無刊所本（慶長庚戌云々の刊記あるのみ、前のロハの何れとも異る版本であり、恐らくはロ本による覆刻であらう）

ロハ：同版
ロニ：異版

が存するものであつたのである。さて以上の事は前稿「慶長版倭玉篇版種攷」の末尾に於いて、略述して置いたのであるが、今改めて然う推定した事情を、比較的詳しく述べて見るのである。

因みに、自分が手にし得る有刊所本は

龍谷大學圖書館藏本　改裝三冊本
及び、自分の藏する三冊本（但し刊記の頁のみは、無刊所本にて補はれて居る）であるが、他に、
杉浦　丘園氏藏本　改裝合綴一冊本
をも曾て見せて頂いて調査した事がある。また無刊所本としては、京都大學圖書館所藏の改裝三冊本が一部あるのみである。

二

先づハの有刊所本とニの無刊所本との關係を述べる。さて此の二本は、本文の樣子が非常に精密に酷似して居り、其の酷似の程度と云へば、任意の頁を開いて、此の二種が同版であるか、異版であるかを檢して見ても、其の相違點が殆んど發見できないくらゐのものである。從がうて不注意に觀察する場合には、其の異版である事が看過せられる

のであるが、實際はまさしく版木の異るものである。先づ刊記のある最終の頁を檢するに、兩者は殆んど微細な點に至るまでも酷似して居り、一寸見た位では、其の相違に氣付かぬ程ではあるが、其れでも流石に少しの相違は存するのである。卽ち先づ文字に非る部分に就いて云ふと、版心の上下の魚尾に於いて微細な相違があり、部首文字の上方のカツト式の飾り模樣も、無刊所本の方が有刊所本よりは纖細であり、形も明らかに異つて居る。更らに文字に就いて云へば倭玉篇とある篇字の第十二畫の撥ね具合、尊字の第十一畫の撥ね具合、「四百七十七」とある後の方の七字の第二畫の末の押へ具合に相異がある。しかして是れらは、實に微細な相違であるが、こゝに最大の相違として、戌字の訓マボルのボが、有刊所本ではホの第二、三、四の三畫が連續した筆法と成つて居るが、無刊所本では三畫は筆法に於いて連續しては居ないと云ふ相違が存する。又、亥字の音註ガイのイ字の第二畫が、有刊所本では曲線化して居るのも、注意すべきであらう。

此の他にも、擴大鏡的精査を試ると、極めて微細な小異――それらは、摺刷の際の一寸した手具合とか、摩損せぬ時と摩損してからとの相違とは認められぬものである――が存するのは云ふ迄でも無い。更らに此の頁の表頁を檢しても、第四行第三段目の字の旁の第六畫の形、第三行第二段酷字の篇の第五畫の曲り具合、第二行第三段目酌字の旁の第二畫の撥ね具合などに相違がある。

しかして、斯う云ふ事實は、やがて此の頁だけに就いて云へば、有刊所本、無刊所本が異版である事を示すものであるのは云ふまでも無い。だがしかし、本版の整版本に於いては、其の大部分の版本は改刻せずして捨て置き、其の小部分の版本のみを、殊には刊記のところの版木のみを、然る可き理由ありて改刻する事は珍らしく無いのであるか

ら卷末の版木數枚を改刻した一例としては和名抄大字本が寛文七年仲秋發行の謙川本と成る時に、第二十卷の二五丁以下四丁分が改刻せられて居る例がある。又一部の書の中に、異つた版木で摺られたものが混在する例としては、正平版論語の變改論點本の中に其の原版たる變改論本が混在して居る事實が存する。尤も寄本（ヨセボン）足本（タシボン）の事は別である。倭玉篇の刊記の頁に於いて版木の異る事が指摘できても、其の事から類推して他の頁に至るまで全部改刻せられたなどとは決して輕々しくは云へないのである。そこで他の頁にも、版木の異種なる事を示す事實が存するか何うかを、一々檢して見る必要がある。しかして然う云ふ調査を試みた結果は版木の相異を示す事實が上中下三卷三冊、計二百四十三丁の中に、まばらに普遍的に存する事を知り得て、有刊所本と無刊所本とが、異版關係に存する事は明かに成つたのである。今其れらの異版關係なる事を明示する事項の中、注意すべきものを左に列記する。次ぎ次ぎに記すのが決して全部では無い事は云ふまでも無い。

先づ、文字に關係無き部分としては、一頁の匡廓の大きさの相違、天地の間隔に於いて甚しく異るものもある。下卷二十七丁右の如きは、四分位の相違がある　部首文字上のカット式飾り模樣の相異、版心の魚尾の相異、界線の相違曲つて居たりして特色あるものを比較すれば直ちに氣づくがある。やゝ文字に關した事であるが、其の行の行頭の文字の位置を一致せしめた場合に、行尾の文字の位置が一致せないと云ふ相違がある上卷二五オは其の適例であらう。此の現象は匡廓相違と關聯でし居ると云ひ得る。しかして是れらの相違は、毎頁に存すると云ふのでは無いが、任意に比較した場合に、容易に氣づく程度で、上中下三冊の各所に存する。

さて是れらの相違は、版本としては、根本的な相違である。此の二種の木の版木が、全く別種のものである事は、明かであらう。

しかし乍ら、然う云ふ相違は、餘り興味も引かない事である。具體的に述べて興味を引くのは、無論文字の相違である。ところで文字の相違としては、有刊所本と無刊所本との前後關係を考察する時に述べなければならぬから、特

にこゝで述べるにも及ばないと思ふので、著しいのを擧げると、

○下卷二四ウ三行の豫字の訓註が、有刊所本ではアツカル　アラカジメ　ヨコタル　ヨロコブ（以上第一段）ノブル　ハヤシ　ウレウル　ソムク　ソナウルヤスシ（以上第二段）と成つて居るが、無刊所本では、下段の訓註の順序が全く正反對で、向つて右より左へ、ソナウル、ソムク、ウレウル、ハヤシ、ノブルの順序で並んで居る。

○下卷五二オ六行第一段の文字畜を篇とし、系を旁とす　の訓註の中の一つは、有刊所本ではモチナルであるが、無刊所本ではモチイルである。

○下卷六十丁オ六行異字の訓註コトナリのトナの二字が、有刊所本では、何故か左寄りに、小さく書かれて居る。

○上卷一六ウ三行の侍字の訓註マイルが、有刊所本ではルの二畫が、不必要な程度に左右へ離れ、其の中間へイの第三畫が入り込んで居る。イの第二畫が不自然に長いのでは無くて、マイルの三字を書く可き餘地の無い所へ、三字を書き込んだ爲めに、イとルとが重なつたと云ふ趣きである。

此の他、文字の相違ならば、些細なものも、かなり甚しいものも、後で述べるやうに、數多く存するのである。しかし乍ら、數多く存すると云つても其の發見が容易であると云ふやうな譯では決して無く、寧ろ發見するのに、大いに苦しまねばならぬと云ふ程度であり、まさに、其れくらゐに、兩者の本文は、微細な點まで一致して、模刻の精妙なる事に感心せしめるのである。しかして其れが、文字で無い部分に成ると、兩者の相違を見出すのが遙かに容易なのである。按ふに、開版する場合には、獨特のものを作る時も、模刻本を作る時も文字のところは、版下を書くにも、彫刻をするにも愼重で無ければならないが、文字な[illegible]ざるは、愼重である必要も大いに少いので、模刻本を

作る場合に於いても版下製作者や彫刻師が何れも、安易な氣持と成り得、束縛せられる事が少いから、模刻の原本と其の模刻せられた本との間に、相違も生じ易かつたのであるだらう。

さて上述の如くであつて、有刊所本、無刊所本の二版の間には、上中下三卷にわたりて、平等に相異點が存するのである。此の二本が同じ版木で摺刷せられたもので無くて、別種の版木によりて摺られたものである事は明らかである。しかも此の二種の本は、屢々述べたやうに一寸見た位では、異版なる事が識別できぬ程に精緻に酷似して居るのであつて、此の事は、此の二本の間に、或ひは冠彫的模刻關係があるのでは無いかと云ふ事を疑はしめるに充分であるから、假りに、二版の間に模刻關係が存するとすれば其の何れが原本であり何れが模刻本であるかと云ふ事をも當然考察して見なければならない。（因みに云ふが、此の拙文では、模刻、覆刻をば、冠彫若しくは其れに準ずべき程の忠實な再刻の義にて使用するのである）。

三

だが便宜上、其れに先き立ちて、是非言及せなければならない事がある。其れは有刊所本が後刷本であると云ふ事である。

有刊所本として自分の知つて居るものには、龜田次郎氏貯蓄樓藏本、龍谷大學藏本、岩崎文庫藏本、杉浦丘園氏藏本、其の他古書即寶會で見た數本などがあるが、何れも摺りが佳良であるとは云ひ得ない。かなりに摩損して居るのであり、文字には摩損によると覺しい缺畫も存するのである。しかも、注意すべき事には、刊記の中の陰刻の部分が、まさしく塡木である事を物語つて居るのである。そして此の事は龍谷大學本では不思議にも觀取しにくい程度で

あるが、他の本では例へば訪書餘錄所載本、杉浦氏の雲泉莊由誌卷の一「雲泉文庫慶長年間刊行書籍目錄」昭和三年刊行）所載本などの寫眞を見れば直ぐ判る指摘が容易である。ところで埋木改刻の刊記のある本が存すると云ふ事は、即ち「埋木改刻の刊記の存せざる初刊本」が必ず存在し、此の有刊所本は、其の初刊本の後摺本であると云ふ事を明示して居るのであるのは明らかである。そこで龜田氏は、埋木改刻の無くして單に「慶長庫戌仲春日」とあるのみの本それは龜田氏御所藏本である を擧げて、其れが有刊所本龜田氏の用語は「有刊記本」と云ふのであるが、妥當で無いと思ふから、自分の用語で以て呼ぶのである の初刊本であるとせられたのであるが、其の本は、展覽會で自分が拜見したところに據ると、實は自分の無刊所本と呼ぶ本であつて、全く異版であつたから、龜田氏のお說は妥當では無かつたのである。龜田氏の御講演を承つた時分には、自分は初刊本の存在を確信し乍らも、未だ實物を見ては居なかつたのである。其れで、龜田氏の御話を承り、此の本こそは、其の初刊本であらうと思ひ御講演後に拜見したところ、事實は、京大本で馴染の深い無刊所本であるに過ぎなかつたのである。 其しかして自分は、有刊所本の前摺本なる初刊本に就いて、

（一）刊記は第六行に慶長庫戌仲春日とあるのみで、第七行には何も書いて無いのであるだらう。

（二）右の日附以外に、第七行に刊行所又は刊行者の名が存するのであるかも知れない。

と云ふ二種の本を、最も存在の可能性の多い本として豫想し、さう云ふ態度で探して居たのであつたが、果して昭和八年一月に至りて初刊本を見付ける事が出來た。そして其の本は、右の豫想の中の（一）に相當するものにして、要するに、埋木改刻の存せないのに過ぎない本であつた。しかして流石に有刊所本の前摺本であるから、摩損と云ふ可きものが殆んど無く、其の版木の彫刻の精巧である事を想像せしめるものであつた（有刊所本で摩損により朦朧と成つて居るもの、又は缺畫と成つて居るものであつて、初刊本では然うは成つて居ないものが多い。一例を擧げると默字下卷二オ五の訓註モダスが、有刊所本杉浦丘園氏藏本、龍谷大學藏本、自分の藏本などでヒダスと成つて居るが單刊記本もヒダスに作るのは注意すべきである 初刊本では、

缺畫は少々はあるがヰダスと成つて居るのである)。さて此の本は、幕末から明治へかけての國學者として、殊には浩瀚精詳な部首分類漢和辭書たる國典字彙の著者として有名な敷田年治翁(明治三十五年に八十六歳にて歿す)の愛藏品で、今は翁の高弟たる角正方氏(國典字彙は、單式印刷に據る模範的覆刻が、氏の御慾力により計畫せられ、日下殆んど準備が出來て居る。完成の早からむ事を切に祈る次第である。)が秘藏せられるもの、丹表紙三冊の善本ではあるが、明らかに改裝本である。年治翁の「百園文庫」と云ふ長方形朱印が捺してある。

さて斯くの如くにして、有刊所本の初刊本の事は、其の埋木改刻の事實より、合理的に存在が推定せられ、しかして、其の儼存は確められたのであるが、ひそかに考へるに、從來此の初刊本の事を明確に意識し、其の存在を積極的に述べた人は無かつたやうに思はれる。是れは蓋し、初刊本と、其れの模刻本たる無刊所本とは、刊記が全く同じである爲めに、其の識別が困難と成り――此の二種類の存する事を知り、其の特長を確證した上で積極的に探し求めるならば、探し求める事も出來ようが、二種類の存すると云ふ事を知らずしては、第一に、比較して見ると云ふ意志が動く筈も無い。遇然此の二種を手許に置き得た人が、漫然と並べて、さて其の異同に氣付くと云ふ事が無いとも云へないだらうが、しかし、此の二種を遇然手にして、比較し得る境遇に置かれると云ふ事がそも〳〵難しい事なのである。以て初刊本と無刊所本との相異の辨別が、普通の場合では至難である事を察し得よう――其の結果は、慶長庚戌仲春日の刊記さへあらば、同じ版であると輕々しく斷定看過せられ、一方の本、例へば訪書餘錄の丙本に誤認せられる事が多かつたのに基くものであらうと信じる。しかして、若し一旦初刊本又は其の後摺本たる有刊所本と無刊所本との版種關係を確認し得たならば、やがては此の慶長十五年版に關して述べる場合には、右の三本の事を必ずや說かずには居られないであらうとも思ふ。とにかく、慶長庚戌仲春日と云ふ同じ刊記はあつても、其の中には異種のもの

が存するのだと云ふ事を充分知つて居る人間であるならば、同じ刊記を持つ慶長十五年版全部に對して注意深く成り、積極的に其の異同を記すに至るのが、自然の心理狀態であると思ふ。であるから逆に云つて、是れらの本につき明確な事を述べて居ない場合には、其の人に明確な認識の無かつた事を想像して可いものであるとも思ふ。

例へば、舊刻書目の大久保酉山は、有刊所本と慶長庚戌仲春日とあるだけの本との關係に就いて、「別本」とか「元本」とか云ひ乍らも、一方では又「入木シテ新板スル」などと云つて（此の全文は前稿で引用した）全く曖昧で、眞意の捕捉しにくい事を述べて居るが是れなどは、善意に解釋せうとしても、彼れが三本に就いて精確な識別をして居たとは認め難いのである。朝倉氏が古刻書史で不明瞭な事を述べて居られるのも（此の書も前稿で引用した）酉山の場合と全く同じであると見る他は無いのである。酉山にしても、朝倉氏にしても、精確に識別して居たならば、も少し明確な事が述べ得られたのではあるまいか。明確な認識があつたならば、其の明確な認識を人に傳へる爲めに、明確な記載をなすように努力した事であらう。

酉山にしても朝倉氏にしても、有刊所本の陰刻刊記をば「入木」と認めたのであるが、其れでさへ右の通りである。ところが訪書餘錄の和田氏は、無刊所本が有刊所本と版を異にするものである事を明記する事はせられたが、有刊所本に埋木の存する事は、埋木である事が明瞭である本を捉へ乍らも、明言しては居られないのである。氏が埋木の事に氣づかれたならば、愛書家として、あれ程も古刊和玉篇類を見られた氏としては、勢ひ初刊本の存在を推測し、やがて見出しもして、存在を明記する事が出來た筈である。しかも氏は、全く其れをせられなかつたのである。氏が埋木改刻に氣づかず、從うて初刊本の事に氣づかれなかつた事を想像しても大過あるまいと思ふ。

版種の研究と云ふ事は一見容易であるが、實はさう云ふ風に單純容易なものでは無いのである。

さて右の如くであるから、今は、一樣に慶長庚戌仲春日と云ふ刊記があるにしても、其れが自分の所謂初刊本の事であるか、それとも無刊所本の事であるかを辨別する事は容易に成つた筈である。同時に又、刊記の缺けて居る本であつても、其れが初刊本であるか、無刊所本であるかを識別をなすは、至極容易である（初刊本と有刊所本との識別は、先づ摺刷の佳惡で決定したら可からう）。久原文庫に慶長十八年の單刊記本が二種存するが、其の中の澁表紙三冊本は、版の異るものを寄せ集めて一部となした本であつて、下卷はまさしく單刊記本であるが、上中二卷は、まさしく十五年の初刊本系である。摺刷が甚だ佳良である事から察すれば、後摺の有刊所本では無くて、前摺の初刊本であらう。

四

初刊本（及び有刊所本）と無刊所本とが異版であつて、模刻關係の存するものなる事は上述の如くである。然らば何れが原本であり、何れが其れによる模刻覆刻版であると云ふ可きだらうか。

姑く倭玉篇と無關係にて右の如き問題を考へて見るに、模刻關係の想像せられる二版の間に於いては、如何にして、原版と其の模刻本とを識別したら可いか。是れについては、演繹的な考察も可能であらう。

若し、甲乙二版の間に完全無缺の模刻關係がありて、原版と模刻版との間に、誤刻と訂正、增補と云ふやうな現象が無くて、模刻版が原版の忠實な模刻版であると云ふやうな場合であるならば、しかも其の模刻が原版の開版と、時間的に大きな隔りが無い場合であるとすると、よしや、今比較材料と成る其れら兩種版本により摺刷せられた遺品の

間に、多少の版の精粗、摩損程度の相違と云ふやうなものが存するとしても、開版の前後を識別する事は、絶對に不可能であると信じる。だがしかし、模刻が忠實で無くて、二版の間に、何らかの相違が存するとせむか、其の時にはじめて開版の先後、即ち原本と模刻本との區別を鑑別し得ると云へるのではあるまいか。しかして其の「何らかの相違」と云ふのは、匡廓、界線、飾り模様、魚尾などに關したものでは無くて、云ふまでも無く、本文に關したものなのである。實に、木版物に於いては、文字關係の事項以外によりては、模刻版と原版との鑑別が至難のものであるのである。錦繪の蒐集家が、僞版をつかまされる理由を考慮すべきである。

さて原版と模刻版との間に於ける本文に關した相違と云へば、要するに(イ)誤刻即ち悪變（拙い譯であるが、本文が悪く成ると云ふ意味に使ふのである）(ロ)訂正(ハ)本文改竄の三種である。しかして先づ(ハ)の本文改竄と云ふのは、無論一部分の改竄にして、第二節で擧げた例の中の初めの二例の如きを云ふのであるが、是れらは決して版の模刻關係を示す材料とは成り得ない。なほ倭玉篇の如き辭書にては、其の訓註の部分的增減と云ふ現象もあり得が、其れも改竄の中に數ふ可きものであり、是れ亦やはり版の模刻關係を示す材料と成り難いものである。蓋し訓註が多いからと云つて、其れが後の版で增補せられたのだとも云へないし、又訓註が少いからとて、其れが後の模刻版で削除せられたのであるとも明言できないからである。例へば濟字中卷六七オ一の訓註は「ワタル　スクウ」「ヒトシ」「タスク」の四訓が三行に書かれて居り、第二段の兩行間は有刊所本（また其の初刊本）に於いては、一行が空白と成つて居るが、無刊所本にては其の空白の行に「ソ」と云ふ一字が存する。しかして其の「ソ」は十八年單刊記本にも無い訓であり、意味も判らないものだが、とにかく訓註であるとするにしても、是れの有る本が原本であり無い本が後の模刻本であるとも云へないし、其の反對の事も云へないのである（橙字上卷一三オ二の例は誤譯の例であり、しかも注意すべきものであるから後にて述べ

る）とにかく、本文の改竄と云ふ事は、模刻關係を鑑別する材料とは成り難い。

次ぎに（ニ）の訂正であるが、是れは、原版では誤つて居るものを、模刻する場合に訂正する事を云ふのであつて、若し訂正したのである事が、明瞭し得る場合には、訂正の行はれた本が、模刻版であると云へるのである。故に、實質上は、やはり本文改竄の中に入れる可きだが、便宜上、此の項を立てるのである。次ぎに（イ）の誤刻悪變は、原本では正しく成つて居るものを、模刻の時、版下製作者が書き誤るか、若しくは彫刻師が誤刻するかを云ふのであり、其れが原版を誤つたものである事が推定せられる場合には、其の悪變本が、模刻本である事は、明らかと成るのであるから、是れ又、やはり本文改竄現象の一つであるが、便宜上、別の取扱ひをするのである。

さて此の悪變と訂正との二つの現象の中で、誤刻悪變の方が最もよく、模刻關係を鑑別するのに役立つものであると思ふ。しかして誤刻悪變と訂正とは、二つの本文の中の一つが正しくて他が悪いのであると云ふ點で一致して居る。そこで、悪變と見るか訂正と見るかの解釋が重要と成るのである。

五

さて有刊所本と無刊所本とを比較すると、兩本何れに於いても誤られて居る例も存する。しかして是れらは、誤りが共通であるから模刻關係の忠實である事を見るに足るだけの事であり、版の前後を定めるのには無論役立たない。ところで一方が正しいのに、一方が誤つて居る例を檢するに、先づ初刊本が誤つて居るのに、無刊所本では正しい例が極めて少數ではあるが存する。（但し此の中には、版木に摩損が存するが爲めに、摺刷せられた場合に誤字として現はれると云ふ性質のものと覺しきは數へるので無いのは無論である。此處に云ふ誤りとは、版木に最初より存する

もの丶事である。其れが、版下の誤りに基くか、誤刻であるかは問ふところでは無い)。さて、一々無刊所本、有刊所本など丶云ふのも煩はしいから、其れ〴〵無本、有本、初本と呼ぶ事とし、參考として、十八年の單刊記本を引く時は單本と呼ぶ事とする。

○上卷六オ五封字の訓註オホキのホが初本では第二、三畫が聯續して變な形と成つて居るが、無本はまさしくホである。單本は、初本と同じ形である。

○上卷三七ウ一噫字の訓に、無本、單本其の他にイキと云ふのがあるが、其のイが初本では丨に近い形と成つて居る。

○上卷四〇ウ四嗫字の訓クラウのラが、初本ではウの如き形と成つて居るが無本ではまさしくラと成つて居る。單本は初本の形を眞似して居る。

○上卷四六オ二の四手篇に喬を旁とすの訓にナホレとあるものが無本ではナホシと成つて居る。單本もナホレ。

○上卷四九ウ二の二の訓註ヲナキのキが初本は第二畫の上に今一畫但し縱棒を貫かず存し、横畫が三本と成つて居るが、無本はまさしくキである。單本もキ。

因みに

○上卷七六オ一微字の訓、無本にフキラカナラスに作るものが、有本にてはキがナの如く見られるのは、初本ではかすか乍らもキの第二畫が殘存して居るから、有本のは摩損によるものであり、問題にはならない。

○中卷四六ウ一の一に、無本がカウブクロと書いて居るのは、康熙字典に據ると香囊の義である。ところで有本で

36

はアウブクロに作つて居るが是れ又、初本では明らかにカウブクロに作つて居るから有本は、摩損に據りてアと成つたものにて、是れ亦問題に成らない。

數も少く、誤りと云つても、甚しい誤りと云ふ程でも無いが、とにかく右の如き例が存する。（他にも有るかは知らぬが、氣付かぬ）。

さて、斯くの如き現象は、兩版の模刻關係を何う云ふ風に示して居ると見る可きか。正しい方の無刊所本が原版であつて、其れが模刻せられて有刊所本と成るに際し、版下の誤り、彫刻の誤りが生じたと見る可きか。其れとも其の反對に、有刊所本より其の模刻本たる無刊所本が生れるに際して注意深い當事者により訂正せられたと見る可きであらうか。ところで、一々の例は、其の如何なる事情によりて生じたかを推知せしめるに足る程のものでは決して無い事を遺憾乍ら自分は認める他は無い。

ところで、右とは反對にて、有刊所本では正しいのに、無刊所本では正しくない例が、右とは比較にならぬ位に多く存する。しかして、此の現象を個々の例について觀察した結果は其の無刊所本の誤りは、惡變現象であり、有刊所本の正しいのは、本來正しいのであつて、無刊所本の誤りが訂正せられたのでは決して無い事を感ずるに至り、斯くて自分は、有刊所本（若しくは其の初刊本）の方が原本であり、無刊所本の方が模刻本である事を信ずるに至つたのである。其れらの例の重なるは左の如きものである。例により十八年單刊記本との異同をも記す。一々何本にと斷つてないものは、凡て初刊本の事である。なほ印刷に困る漢字は、頁、行、段を示すだけに止めた。

上卷

○一七ウ四ノ三 ホゴルはホコル(誇)と有る可きものらしいが、無本は缺畫ありてホゴルと成つて居る。但し摩滅かも知れぬ。單本ホゴル。

○二一ウ三 僣ニナフを無本マナフに作る。單本ニナフ。

○二一ウ七ノ四 ワブを無本ソブに作る。單本ワブ。

○二三オ一 夫フツトはヲツトの誤刻と信ぜられるが、無本がソツトに作るは、フツトに據りて更らに誤りたるものである。單本もソツト。

○二三オ七ノ三 ミ(身)を無本ミに作るは摩滅に非じ。單本ミ。

○二三ウ七 女タマヅサ、無本クマヅサ、單本タマヅサ。

○二八オ一頃 コロヲイを無本コロライに作る。單本も亦コロライに誤るは注意すべきである。

○三〇オ二ノ三 ハナクチタリのタがクの形と成つて居るが、無本は完全にハナクチクリに作つて居る。無本より初本が生れたのであるならば、クがクと成る事は有るまい。單本もク。

○三〇ウ二(目篇にて旁は卒)ニギラカナリが無本ニギヲカナリ、單本ニギラカナリ。

○三一ウ四ノ四 カクスを無本カクフに作るは誤刻か摩滅か。單本カクス。

○四四オ五 播ハビコルと有る可きものが、ハビニルと成つて居るのは誤刻と信ぜられるが、無本では、完全にハビマルに作つて居る。單本もハビマルに作るのは面白い。

○五三オ十五 髓トフルを無本トラルに作る。單本トフル。

○六一オ二ノ三　無本にマコレとあるが是れを、初本にてマコトと作る可きだのに、トが缺刻によりて、第一畫の榛の下半が缺けてレに近い變な形と成つて居るのに比較すると、無本は其の初本より生れたものであり、無本より初本が生れたもので無い事を見るに足らう。單本はまたマコヒに作つて居る。

○六四オ一愚　イヤシを無本イカシに作るはヤがやゝカに近い形しかし決してカでは無いと成つて居るから、誤つたものと見られる。單本イヤシ。

中卷

○二オ七ノ二　イヱを無本イユに作る。單本ノユに作るは摩滅か。

○一三オ二　橙　初本ではタチバナ・ヤマタチハナ・ハナタチバナの三訓の中のハナタチバナの最初のナは缺刻（最初からの缺刻であらう）によりユの形と成つて居り、其の結果、ナと下のタチバナとの間が不必要の程度に離れて居る感じがするが、無本では此のハナタチバナに相當する所へ譯の判らないハユの一訓を刻して居るに過ぎない。是れは明らかに無本の開版當事者が無識にして、底本たる初本にハナとあるのがハナであり、ハナタチバナと續く一語であると云ふ事を理解せずして、ハナとタチバナを二語であると誤解し、さてハナをさかしらからハユに作り、下のタチバナは第一行のと重複するからと云ふので、削除したものである事は明らかである。此の一事は、無本が初本から出たものであり、初本が無本から出たもので無い事を明瞭に物語るものと云はねばならぬ。無本から初本が生れる場合ならば、右の現象の生ずる筈は無い事である。因みに無本が初本に據らずして初本の親本と云ふやうなものに據つたのでは無いかと云ふ疑ひを抱く場合には、其の當否を判斷する材料の一つとして、此のハナタチバナが

役立つ事が考へられるのである。

○一三オ四 榮 ハナサクを無本はハナサラに作る。單本ハナサク。

○一四ウ二 果 無本でツノニと作る訓註は、初本を見ればツイニの誤りである事が判る。初本ではイの第二畫が缺けてイの形と成つたので、其れが模刻せられる時に、完全にノと誤られるに至つたのであると見る他は無い。單本が更らにツメニに作るは注意すべきである。

○一七オ五 無本にヲガツカナシとあるはいぶかしき訓註であるが、無論ヲボツカナシの誤りでなければならぬ。ところで初本にてはボが變な字體と成り居りて、ガと讀めない事は無く、又ツの下のカが彫刻の拙き爲め、第一畫の末の方が餘りに短かく且つかすかでありて、其の結果カがナと見誤られ得る形と成つて居るのである。初本から無本の誤刻が生れたのである事は明白であらう。單本がヲガツカナシに作つて居るのは、其の底本を暗示して居るとも云へる。

○二一オ六ノ四 (草冠の下へ族を書く字) アツマルが無本ではスツマル。單本アツマル。

○二一ウ五 荀 初本のヲヽチを無本がラヽチに作るは、ヲをラと見誤つた爲めである。單本ヲヽチ。

○三九ウ五ノ一 初本のヤナ(梁の疑)を無本、單本ともにカナに誤るは、初本のヤがカに近い形と成つて居るからである。

○四三オ六ノ一 初本のマメガラを無本マメガツに誤るはラをツに見誤りしもの。單本は正し。

○四三ウ七ノ四 無本がマノヽ(ノヽは一字とも云へず、半ば二字と見る可きか)に作るは、初本のマメ(豆)を誤りしもの。

初本ではメの二畫の交叉點が、かすれて少し曖昧と成つて居るからである。單本はマメ。

○四七ウ三 矯 初本イツワリ、無本イソワリ。但し摩滅か。單本イツワリ。

○四七ウ三 矧 初本イワンヤ、無本イウンヤ。單本イワンヤ。

○四七ウ五 彌 初本にヲヽイや（やは片假名のヤに一畫多い形）とあるは「ヲヽイ也」即ち「大也（おほいなり）」と云ふ事であるが無本がヲヽイヤに作つてしまつて居るのは、無識による。單本は初本と同じ。さて是れと同じ誤りが

○六五ウ五 介の訓註「ヲヽイ也」に於いて存する。單本は正しい。

○四八ウ三 斯 初本のコレを無本コシに誤る。單本コレ。

○四九オ十 戴 初本のホソシを無本ホワシに誤るは、ソをワと見誤りしもの。單本ホソシ。

○五六オ七 繫 初本のケヅルを無本ケグルに誤る。單本ケヅル。

○七九オ一 眠 初本にハツマジとあるは常識上ムツマジの誤刻か摩滅かならんと容易に想像せられるが（現にハの形は、ハでは無く、ムの缺刻であると見得るのである）是れが無本では完全にハツマジと成つて居る。單本では、ムの缺刻でも無く、さりとて完全なハでも無い形と成つて居る。初本を模刻するに當り、初本の缺刻に惱まされた姿がまざ〳〵と浮んで來る。

下卷

○一八オ一ノ四 初本のワシルを無本、單本ともにヤシルに誤る。ヤ、ワも誤刻が生じ易い字形である。

○二五ウ三 鳥 初本のヤワラグを、無本、單本ともにカワラグに作る。

○三〇オ一 雅 初本では此の字にカモの訓があるが、無本では其れが單にモと成つて居る。これは、カモのカと其の左上

方のタシカのカとが接近して存する爲めに、カモのカが誤解により削除せられたか、又は見落されたかの何れかであらう。此の場合には版下に部分的な加筆が施されたのであらう。單本もカモ。

○四六ウ二 勒 キザムを無本キザスに誤るは、初本で、ムが缺刻其の他により、スと見誤られやすい形と成つて居るからである。單本はキザクに誤る。

○四八ウ七 緣 フチを無本フキに誤る。チ、キも誤讀の生じやすい字形である。單本フチ。

○五〇オ一 縝 初本のイヨ〳〵を無本はイヨノ、に誤る。單本イヨ〳〵。

○五〇ウ五 繹 初本でヲ、イニのニの第二畫が不必要の程度に延びて、下の界線に接して居るが、無本はニを、に誤つて居る。單本の字形は初本と全く同じ。

○五八オ一（衣篇に宇を書く字） 初本のヤブレコロモを無本、單本ともにカブレコロモに作るはヤ、カの誤り。

○五四ウ五ノ二 初本にキヌヌの缺刻とあるものを、無本ではキヌ、に作られて居る。單本キヌ。

○六〇オ七 事 初本のソサを無本ソサに誤る。單本ワサ。

○六二ウ三 固 初本カタメ、無本カタヌ、單本カタメ。初本のメの筆のはじまりが餘りに强く現はれて居る爲めに、ヌに誤られたのである。

さて自分は、右の一群の如き例は、右刊所本が模刻せられて無刊所本と成る際に於ける惡變であると解釋するのである。

尤も斯う解釋することは、右刊所本で誤つて居るものでしかも無刊所本では正しく成つて居るものをば、無刊所本

42

が有刊所本を訂正したのであると解釋せなければならなくなるから、一見して、矛盾であるかの如くに見られないでも無いが、しかし、其れは決して矛盾では無いと思ふ。自分は「無刊所本は有刊所本を模刻したものである。從つて模刻本に附きものゝ改惡現象が生じたのである。しかし模刻當事者には、もとより改惡本を作らうと云ふやうな意志は絶對に有る筈は無く、其の反對に、有刊所本を訂正したいと云ふ意向は確かに有して居た筈である。そこで其の訂正せんとする意志が實現せられて、無刊所本に於ける少數の訂正現象と成つたのである。同時に一方では、不注意と無識とにより、知らず〳〵の中に數多の誤謬をも發生せしめたのである。其れが無刊所本に於ける數多き惡變現象である」と解釋する。

但し同[illegible]料でも、解釋は正反對に成り得る。自分は、有刊所本と無刊所本との關係に就いて、右の如く解釋したのであるが、正反對の解釋が生ずるかも知れない。自分の解釋の當否に就きて叱正を仰ぎたい。（次號にて完結）

一月號「慶長版倭玉篇版種攷」正誤

主なるものに就いて其の正しき方を擧ぐ。

一四頁	九行	寛平年中
一八頁	八行	上中二册
二六頁	九行	相同じけれど
二八頁	一〇行細註	其の性質
二九頁	四行	天本→地本
		人本
三二頁	五行	活字和玉篇
九四頁	二行	前稿

立命館文學　第一卷　第三號

慶長十五年版倭玉篇の版種（二）

岡田希雄

六

無刊所本が有刊所本の模刻版であると解する場合に、綴いて考へねばならぬ事は、（イ）無刊所本が、有刊所本の模刻であるか、其れとも初刊本の模刻であるか（ロ）模刻の版下は、版本其のものであつたか、一度丁寧に筆寫して其れを彫刻したかと云ふ事である。そして（イ）の方は、是れを推知する唯一の方法は、摩損に據りて摺りが惡く成つたものを版下としたが爲めに生ずる筈の誤りを檢する事であるが、しかし、是れは永久に不可能である。蓋し有刊所本の最初の摺刷本が如何なる程度の摩損を有して居たかを知る事が、全く不可能であるがためである。われわれは、模刻本を作る時は、成る可く原版の中で摺りの佳良なものを採用するのが普通であると云ふ事から、初刊本が原本と成つたものであらうと考へて置く他は無いと信じる。

さて次ぎは、模刻の版下が初刊本（若しくは有刊所本）其のものであつたか、又は、其れを一度筆で克明に寫し取りて、其れを版下としたのであるかと云ふ事であるが、或る刊本を模刻する場合には、普通は、原本を其の儘に使用するのである事（所謂冠彫（カブセボリ）である。字形の不鮮明なるものは筆で明瞭にし、又、訂正すべき所は、紙の切り貼りにより訂正するのは無論である。）から考へて、又、筆で一度寫し取る場

合には、如何に克明に忠實に寫し取つても、流石に初刊本と無刊所本との如き精緻な酷似關係を保ち得る事は不可能であると信じる事から、自分は、此の二本の模刻關係は寇彫であつたと先づ演繹的に、信ずる所である。實際、既に刻本が存し、其れを模刻すると云ふ場合――模刻せないのであるならば別問題である――に、一々筆で寫し取る面倒を敢てすると云ふ事は、常識上考へられない事である。

だがしかし然うも簡單には云へないらしい。既でに述べた通りに、モチキルがモチイルと成つて居たり、豫字の訓註の順序が正反對に成つて居たりする例はある。多少の手が加へられて居る事は認めなければならぬ。

さらに又、解釋に困る事實が存する。即ち模刻本たる無刊所本の匡廓が、原本たる初刊本のものよりは、概して狹小であると云ふ事である。更らに又、行長の相違と云ふ事である。一体或る版本が存して、其の版本其のものを版下として再び模刻版を起すと云ふ場合には、原本と模刻本との間に、伸縮の相違と云ふ如き事は、先づ生ぜないのが普通であると考へられる事であり、又實際として模刻關係のある兩書を敷き重ねて檢した時は、伸縮の相違が無いと云つて可い例の存するのも知つて居るのであるが、此の倭玉篇の初刊本と無刊所本との間では、匡廓に於いてかなり著しい相違が存するのである。しかして是れ一つならば、模刻本として無刊所本を開版する時に、匡廓だけを縮めたのだとも云へさうだが、必ずしもさうは單純に云へないらしい。それは、各頁の各行の長さ――各行は四段であるから、第一段の最初の文字より第四段の最初の文字に至る長さを意味するのである――を比較すると、初刊本の方が概して、無刊所本よりは少しづゝ長いと云ふ事實が存する。そして此の事は、中卷の二十丁分程を除くと、他は殆んど全部に、些細ながらも、此の行長の相違が存する。一例を擧げると、上卷二三丁ウ第七行を見るに、天地の匡廓

に於て、無刊所本は二分五厘短かく、第一段の女字より第四段の姓字に至る長さは、無刊所本の方が一分五厘以上縮んで居る。是れで見ると、此の頁では初刊本共のものを共の儘で版下としたのであるとも認められない。しかし、字形などは甚だよく似て居り、筆で寫しとりて版下を作つたものだらうとは考へられない程度である。

が各行の行長は少しづゝの相違が存するにしても、各行中の四個の枠（ワク）の中の文字群共のものは、大体一致するのでは無いかと云ふ事が考へられるが、是れも必ずしも、然うでは無い。下卷六十四丁オ第六行第一段無字の枠を檢するにイナヤの位置は二書で一致せない。第五行第三段亡字の枠、第四行第二段蠱字の枠、第三行第一段の枠、第四段直字の枠、第二行斜字の枠も共れ〴〵少しづゝ一致せない。

さて斯かる吟味は、本書の如き古刊稀覯本に於いて到底、三卷全部にわたりて出來得る筋のものでは無く、たゞ京都帝大本は、本が荒れて居て、版心の折目が、古書で普通見得る如くに、幸か不幸か裂けて離れて居るのが、各冊に少しづゝ存するから、共れだけにつきて吟味する事が出來た譯なのである。ところが、右の如くに、大体に於いて、程度は様々であるが、微細な、又はかなりに著しき相違の存するのを、確め得るのである。斯う云ふ事實が存する以上は、模刻關係が單純な冠彫であると見るのは躊躇せられなければならぬやうだ。がさりとて、初刊本を底本として覆刻する時に、一々筆で寫しとり（しかも其の寫し取る際には、極めて克明に丁寧精緻に寫し、後人が二版を比較して擴大鏡的精査を行うても、大部分は筆意の相違を見付けるのが困難であり、不注意に見た位では、同じものである。と誤解してしまふ程なのである）共の際、匡廓や行長を縮める爲めに煩はしい手心を、全部にわたりて加へ、共れを版下としたであらうとも、考へ難い事である。そこで自分は、やはり、無刊所本は、初刊本を大体に於いて冠彫し、

一方では必要に應じて、手を加へもしたのではあるまいかと疑うて置きたい。高教を仰ぐ次第である。

七

さて斯くの如くに、初刊本がかなりに精緻に模刻せられて生れたのが、無刊所本であつたのである。しかも其のやうに精緻に模刻せられたにも拘らず、模刻本たる無刊所本は、初刊本を訂正する事は甚だ少くして、反對に、惡くした事が、比較できない程に多いのである。此の事から、慶長版倭玉篇を國語學資料として採用する場合には、無刊所本よりも、其の模刻の底本となつたと覺しい「初刊本」を重んずべきである事が明言できる。有刊所本よりも其の前摺本たる「初刊本」を採る可きであるのも云ふまでもない。若し東井叟本と初刊本とが、やはり模刻關係に在るとしたならば、今度は、初刊本を捨てゝ東井叟本を採るべきであることを豫想しても大過はあるまい。

八

とにかく、初刊本(有刊所本)對無刊所本の關係は、此の二種の本にのみついて云へば——未見の東井叟本を見る事できる場合には、考へが動搖するかも知れないから、「此の二種の本にのみついて」と斷つて置くのである——原本と其の模刻本との關係が存するのであつた。さて模刻本である以上は、其の原本たる初刊本が彫刻刊行せられたと覺しい慶長十五年二月に、此の模刻本が彫刻せられたらうとは、常識上先づ〳〵考へられないところである。普通の事情から云へば、斯う云ふ模刻本が出ると云ふのは、原本の版本が、需要の激甚である爲めに摩損せられて、も早や使用できなくなつた場合とか、若しくは、火災、水災等により版本が失はれるに至つた場合とかに於いて、自然的に再刊せられるのであつた。從うて版本摩損に據る場合の模刻ならば、其の再刻は、原本が刊行せられた時から云へば

なりに後の事であつた筈で、何う解釋したところで、原本が刊行せられた其の同じ月に、再刻本が現はれるなどゝ云ふ事は、絶對に考へられない事である(版木の彫刻にも又其の摺刷製本にも相當の日數がかゝる筈である)。たゞ火災水災に據る版木喪失の場合であるならば、原本の開版と同時に起り得る事であるかも知れないと云へるが、其れも極端な解釋であらう。しかして有刊所本を見ると、其の版木は明かに甚しく摩損してゐるのだから、其の再刻は版木喪失による再刻であるとは見られず、まさに版木摩損による再刻であると見なければなるまい。なほ、蹔說的に云へば倭玉篇の需要の激甚であるのを見て、利に敏き好商が、惡意から原本の賣り出されると同時に、直ちに僞版の模刻に着手すると云ふ場合(從うて、刊記をはじめとして、体裁までも模倣して紛らはしいものを作るのは理の當然である)も想像せられはするが、其れにしたところで、眞に開版せられるのは、原本と同月であり得る筈が無いであらう。必ずや多少は後れる事であらう。但し此の場合には、原本と紛らはしい僞本を作ると云ふ惡意が明かに動いて居るのだから、刊記までも原本と全く同じにすると云ふ事も考へ得る。が是れは要するに甚し過ぎる蹔說と云ふ可きであるかも知れない。

要するに、初刊本(有刊所本)と無刊所本との間に、模刻關係が存するのを認めなければならぬ以上は、模刻本の開版完成は、決して原本の開版完成の月と同じである筈はなく、しかも模刻本の開版は明らかに原本版木の摩損の甚しい事に基くのであつたのだから、其の開版年時は愈々、原本の開版期を去る事かなりに離れて居る時期を想像す可く或ひは慶長十六年頃であつたかも知れないと云はなければならないのである。

たゞ斯う解する場合には一寸いぶかしく感ぜられるのは、其の目附が、原本のものと同じであると云ふ事であるが

しかし實は是れは、模刻本なるが故に斯うなつて居るのであると見るべく、從うて別段問題にする程の事では無いのである。斯う云ふ例は、大廣益會玉篇附訓本が或る時期に開版せられ、後にその後摺本が出る場合に「寛永八年辛未年秋吉旦新刊」の刊記が埋木で加へられ、更らに、其の模刻本が出る場合に、全く同文同筆意の刊記で現はれたと云ふ例もある。手近なところで云へば、慶長十八年の雙刊記本と單刊記本とが、同時の摺刷であるとは到底信ぜられないのにも拘らず、同じやうに「慶長癸丑仲冬日　開板之」と云ふ刊記の存すると云ふ例も存するのである。

とまれ、初刊本の模刻本として、かなり後に開版せられたのが、無刊所本であらう。そして其の開版の理由は、版木の摩損に甚くものであらう、と平凡に解釋するから、初刊本が後摺の有刊所本と成り、やがて摩損が甚しく成つたので、無刊所本が、初刊本の中の摺刷の鮮明なものを版下として新に彫刻せられたと云ふ事情であつたのだらう。臆測を逞しくして、別の解釋を試みると、有刊所本には、刊行町名があるのに、無刊所本には是れが無い、有刊所本が出て、更らに恐らくは同じ出版者と云ふやうな人によりて無刊所本が開版せられたのであるならば、無刊所本にも刊行町名とか刊行者名とかゞ、前例通りに、記されさうなものであるのに、事實は然うで無くて、刊行町名の如きは記されてないのだから、此の事實から察して、無刊所本は、有刊所本の後に開版せられたのでは無くて、有刊所本と同時ぐらゐに、有刊所本の發賣と競爭的に、有刊所本の書肆以外の者により開版せられたのでは無からうか、と云ふ疑ひも生じるが、これはさかしらめいた推測として、無視して可からう。蓋し後の十八年の雙刊記本にも單刊記本にも刊行町名や刊行者名の如きが無いのを見ると、有刊所本に倣うて、刊行町名を記しさうなものであると云ふ推論が、第一に成立する可能性が無いからである。

以上は、初めに斷つたやうに、初刊本・有刊所本・無刊所本の三種のみに就いて、其の關係を述べたのであるが、更らに、いよ〳〵臆測を逞しくして、別種の本を假想すると成ると、初刊本と無刊所本とは、共に、其の「別種の本」の模刻本として、競爭的に開版せられたのでは無いかと云ふ疑ひも生ぜないでは無いが、其れは、一層繫說的な疑ひであるのは云ふまでもない。

九

有刊所本は、其の刊記が示す通りに、京都二條通二王門町で開版せられたのである。屢々云つた通りに、有刊所本は、初刊本の後摺であるから、此の埋木陰刻の刊記が加へられた其の時に開版せられたので無い事は明かだが、有刊所本の發賣者が、他の人の開版したものを後に購入して、斯う云ふ刊記をも加へたのであると見ない以上は、此の有刊所本の前摺たる初刊本の開版が二王門町で行はれたものである事を認める外はあるまい。

其の二王門町と云ふと、市電東山線仁王門停留場のある仁王門通を思ひ浮べる人もあるかは知らぬが、其は大きな誤であつて、黑川道祐の雍州府志（自序に天和二年夏四月云々と見ゆ）古蹟門上愛宕郡の條に

二王門町　二條通東洞院西也、斯處不レ知レ有レ何寺至近世二王門存、二王像運慶作也、今在清水坂愛宕寺門

と云つて居る町の事である。寛永版以後、天保頃に至るまでの京都古地圖二十種近いものを檢するに、「にわふ門町」「二王門町」「仁王門町」「二王もんの丁」「仁王門の丁」などゝ書かれて居て、用字は一定して居ないが、「二王門の町」と云ふ風に「の」字を添へるのが可いのであらう。現在では、二條通東洞院西へ入ル所の町名で、仁王門町と書かれて居る。

此の町に住む人が開版したのだから、「二王門町開板」の刊記も、開版當初では無くて、後に成りてからではあるが、加へられたのであらう。其の開版者は不明である。但し井上和雄氏の慶長以來書賈集覽は、元和六年極月刊行の禪林類聚の木活四卷本（抄本であるのに禪林類聚の原形なりと誤解して飜刻した人もあるが、甚だ遺憾な事である）の刊行書肆たる「二條通仁王門町長島世兵衛」であるとして居るので、是れで見ると、永島世兵衛の刊行である事を明記した十五年版倭玉篇が存するかのやうにも見られるが、恐らくは然うでは無くて、有刊所本の町名に據りて、同じ町に住んで居た長島世兵衛の開版であるのだらうと擬定したまでの事であらう。明證は無いが、先づ井上氏の擬定に從うて可からう。書賈集覽に據ると、寛永頃にも同じ町に長島與三と云ふ書肆が存する。なほ書賈集覽には見えないが、村上平樂寺も、明暦二年頃には、同じ町で店を出して居たのであつた。（明暦二丙申年初夏吉祥日　開板の伊路波識による）

一〇

最後に、此の慶長十五年有刊所版を以て活字版と見る說が、書賈の間にまゝ存するが（例へば、慶長以來書賈集覽長島世兵衛の條に、有刊所本を信ぜられるものを「活字」と註して居り、又大阪の某書肆の目錄（昭和六年三月のもの、四九頁）の如きにも有刊所本を「木活字」と註して居る）事實は決して然うでは無く、有刊所本をはじめとして、無刊所本も十八年單刊記本も、皆整版であるのである。此の事は、前稿にて念を押して置く可きであつたが、ふと漏したので、今こゝにて云ひ添へて置く次第である。

（昭和八年十二月六日稿）